

リスニングの指導手順 — その変遷 —

森山善美*

Yoshimi MORIYAMA

A Historical Sketch of Procedures for Teaching Listening

ABSTRACT

This article aims to review the changes in teaching procedures for practicing listening in a foreign language. Listening as a distinct skill has come to the limelight rather recently, only about 30 years ago.

At first the teaching procedure was very simple: Presenting spoken language and testing the contents. Now it has become more sophisticated: Giving key words, expressions, background knowledge, etc., to let the learners grasp the outline of the spoken language easily, after which they are led to go into the details. Key words and expressions may be exploited further. First comes the understanding of the contents and then the exploitation of the language used in the spoken passage or dialogue.

【キーワード：英語、リスニング、指導手順】

1. はじめに

リスニングの指導においては、テストはあっても指導がないと言われてきた。また、従来、言語の4技能の扱いに関して、リスニングとスピーキングがひとつの領域、リーディングとライティングがそれぞれひとつの領域とされ、3領域4技能という枠組みがあった。それが、1989年告示の学習指導要領により、中学校、高等学校ともにリスニングとスピーキングが独立した領域とされ、4領域4技能の枠組みとなり、リスニングにも指導の力が置かれ始めた。とかく、読解に傾きがちであった英語教育を、領域別の科目を設けることにより、リスニングやスピーキングにも力点を置いた指導に向かうようになったと言えるのではなからうか。

それにつれて、リスニング指導のための指導手順もいくつか提案されてきた。最近では、コミュニケーション型指導法にのっとった指導手順も工夫され、更なる展開を見せられている。

このようなリスニング指導の手順の変化をたどってみること自体、リスニング指導の参考になるであろうし、指導の考え方を捉えるうえで役に立つと思われる。中学校の「英語」や高等学校の「英語I」、「英語II」といった総合的な英語のなかにもリスニングの指導が含まれているが、本論考ではリスニングを中心とした授業を調べて見る。時期的には、3領域4技能から4領域4技能の枠組みに変わる前後の頃からのリスニングの指導手順を見ていきたい。

2. 学習指導要領に見られる音声面の科目の変遷

中学校では、授業において4技能のバランスをとって指導が行われる、いわば総合的な英語が教えられている。

文法から会話から4技能から、すべて「英語」という科目のなかで教えられている。これに対し、高等学校では、1970年告示の学習指導要領により「英語会話」が設けられ、1978年には総合的な英語にあたる「英語I」、「英語II」のうえに、「英語IIA」（聞き話すこと）、「IIB」（読むこと）、「IIC」（書くこと）といった技能別の科目が加えられた。さらに1989年には「英語IIA」に代えて「オーラル・コミュニケーションA」（日常会話）、「オーラル・コミュニケーションB」（聞くこと）、「オーラル・コミュニケーションC」（スピーチ、ディベート）が設けられた。1998年には、日常会話、聞くこと、といった分野別ではなく、レベル別に改変され、「オーラル・コミュニケーションI」、「オーラル・コミュニケーションII」となり、現在に至っている。

一連の流れを見ると、徐々にリスニング（およびスピーキング）の指導をいかに行うかに重点を置いた検討が加えられているようすがうかがえる。平成18年度からはセンター試験にリスニングが導入され（平成18（2006）年1月21日実施）、学習者、教師ともにこの技能への関心が深まってきている。

3. 3領域4技能におけるリスニングの指導手順

●中学校の場合

まず、「授業時数は105時間（週3時間）を標準とする」とした1969年告示の学習指導要領に対応する指導を見てみる。「学習活動」から「言語活動」への変更が示すように総合的で実際の運用につながる方向を受けてdialogの指導が多く見られるようになったとし、大沢（編）（1978：172-174）が教室英語を発展させたかたちでの聞き話す言語活動を示している。それは、京都市立山科中

* 高根大学教育学部言語文化教育講座

学校の横江稔教諭の授業（1年生）である。その柱は以下のようになっている。

1. Greetings
2. Calling the Roll
3. Talking about the Date and the Weather

これは授業の始まりの部分のようである。1. はよく見られるやりとりであるが、2. では名前を呼ばれたら返事をする、休んだ生徒の理由を聞いてみる、などを行っている。3. では曜日を聞き、そのつづりを答えさせ、さらにはノートに書く、といった作業を英語による指示、やりとりによって行っている。

このあと新出事項の導入においても、教室英語を巧みに利用しているという。そして教師がもっと英語を話すことが基本であるとしている。

中学校では英語の時間に4技能が含まれることが多いであろうから、授業の中で、あるいは授業中を通して、英語の聞き取りや話し方の練習をすることになろう。

中学校第1学年の目標としては、「初歩的な英語を用いて、簡単な事柄を聞いたり話したりすることができるようにさせる。」とし、上級学年では「事柄の概要をとらえながら」とか「事柄の要点をとらえながら」などと規定した1977年公示の学習指導要領のころはどのような状況であったであろうか。

指導要領にはリスニングに関しては、「話題の中心をとらえて、必要な内容を聞きとること」や「相手の意向を聞き取って、的確に話すこと」などの言語活動が示され、妥当な目標が掲げられていると言えよう。困難の増す、聞くことを踏まえた双方向のコミュニケーションにも言及されている。

片山・篠田（編著）（1979：82－99）は、聞き方と話し方の指導について論じている。特に入門期については、「言語は音声である」こと、聞き・話す領域については、「二つの技能は分離可能なこともあるが、聞くことのできないものは話すこともできないと考えるのが普通である。入門期においては、このような考え方で指導にあたるのが無難である。」としている。未知の音を十分に指導すること、文字を軽視するわけではないが、言語は音声であることを認識させ、音から文字へという過程で導入するほうが得策であると述べている。加えて、日本語の影響を考慮して教えることの大切さも指摘している。

実際の指導については、単音だけでなく、弱形を含め、音脱落、同化などを伴った音声の流れに慣らすことの重要性をまずあげている。語彙は、教科書にない語彙でも精選して与えること、語順、形態、機能語など言語の構造面の指導を論じている。聞き方の訓練では、既習の文型、語法、語彙などをできるだけ多く含んだ教材を用いるように工夫すべきことを説いている。

他方、「高等学校の授業では、一般的に言って「読むこと」「書くこと」の訓練に片寄り過ぎる傾向が見られる。」という観察をしている。大学入試や内容がより知

的になることを原因としている。

聞き方の練習では、テープ教材を聞かせるときなども、予備知識を与えたり、絵やスライドなどを利用し、理解の強化、補助に努めるよう望んでいる。

音声面の重視、日本語との対比など、構造言語学的な考えがうかがえ、分節音素やかぶせ音素の指導に特に言及している。また、聞くことと話すことについては、学習の初期ではむしろ密接なものとして教えるほうがよいと述べられているが、このことは同意できる。しかし、上級になるにつれて分離した指導が必要になる。リスニングではなく、やはり「話すこと」（あるいは発音指導・音声指導）に重点を置いた論述になっていると言えよう。

清水（1980：199-200）は、「Oral communicationの能力は言語の本質からも、時代の要請からも学習の初期においては最も重視されるべきものである。その能力を養うには、まず聞きとる力を養わなければならない。」と大切な指摘をしている。さらに続けて「ところが我が国の英語教育では音声指導や聞き取りの練習が中学の1年生を除いてはほとんど行われていない。」とし、従って音素の識別ができないし、速度の遅い、強形中心の人為的な音声に慣らされているので、normal speedの英語は聞き取れない、と当時の様子を伝えている。そしてテレビの英会話講座、16ミリ映画などの利用を勧めている。また、できるだけ多くの英語を聞かせ、聴解の単位を次第に長くすることも提案している。同程度、あるいは少し程度の低い他の読本のテープを聞かせ、細かいことはさておいて全体の大意をつかませる訓練の重要性を説く。「聞く力をつけるにはできるだけ多く、しかも色々の発音に慣れるように、できるだけ多くの人のものを聞くことが大切である。」とし、「聞き取りにも読書と同じように基本的構文とできるだけ多くの語いの知識といろんな内容を理解するための広い常識が必要である。」と多角的な視点から意見を述べている。

片山・篠田（1979：82－99）および清水（1980：199-200）には具体的な指導手順は示されていないが、指摘されるような点に配慮し、授業のなかに適切な活動を組み込むことが望まれる。

そのころの、筑波大学附属中学校と思われる中学校の、入門期でのヒアリングの指導案が示されている（広野、1980：19-21）。以下のものである。

①	<table border="0"> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">聞き取り練習 (Aural Drill)</td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">15分</td> </tr> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">発音練習 (Pronunciation Drill)</td> </tr> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">聞き取り練習テスト (Perception Test)</td> </tr> </table>	聞き取り練習 (Aural Drill)	}	15分	発音練習 (Pronunciation Drill)	聞き取り練習テスト (Perception Test)
聞き取り練習 (Aural Drill)	}	15分				
発音練習 (Pronunciation Drill)						
聞き取り練習テスト (Perception Test)						
②	口頭練習 (Oral Drill)	30分				
③	解説 (Explanation)、歌 (Songs) 等	5分				

説明によると、「…第1学年においては、音声面の指導を特に重視し、英語の音声に慣れさせることを主眼とした約6週間にわたる入門期指導を行う。その後教科書を使用した普通授業に移る。…」という。

①の聞き取り練習では、最小対立の音識別のテープを

聞かせ、聞き取り練習、発音練習を行った後に、鼎立する音を含む語を識別する10題の小テストをしている。②の口頭練習では、教科書の最初のほうのいくつかの課の内容を再編成し、口頭導入を行っている。文字はまだ使えないため、教師は文型練習や新語導入のために写真や実物や動作を利用するという。鏡を用い、教師の口元を正確にまねさせ、無罪のノートに新出語の絵を描かせ、学校での練習や家庭での学習に用いている。③の解説では、その日に勉強した文の意味の確認や質問を受ける程度であった。さらに、やさしい英語の歌をできるだけとり入れて生徒のリズム感を育て、また英語学習の動機づけとしている。

音識別では、意味のわかっていない単語を聞きわける練習をしているようである。音感を鋭くするにはよいであろうが、意味と音を結びつければ一層学習が深くなり実際の言語使用に転移しやすいであろう。聞き取り練習とは言いながら、活動のなかに perception test もあり、むしろ音識別の練習がなされたかと思われる。音声を聞いて、直接内容を理解するという本来の聞き取りと考えられる練習ではないかもしれない。

口頭練習では、意味を伴った基本本文の練習がなされたであろう。音声を聞くことも十分なされたであろうが、口頭重視の指導を反映し、発音の練習は聞き取りの力を促進するということから、発音の指導、口頭練習に力点が置かれていたのではなかろうか。なるほど、発話することと聞き取ることとは関連があるが、発話を重視するあまり、当時は十分に音声に耳を傾けることが不足しがちであった。

さらに広野(1980: 21-22)は、入門期後の普通授業の重要性を指摘し、リスニングの力をつけるには、「毎時間の授業において、できるだけ多く生徒に英語を聞かせることである。」と述べ、「英語の授業とは「聞くこと」「話すこと」が中心であって、「読むこと」「書くこと」ではない…」とまで主張している。聞かせるのは教師の英語が一番であり、新文型や新出語の導入・練習など、いろいろな場面で英語を使用することを勧める。(当時の状況を暗示するかのように、「授業によっては、こういう作業さえもほとんどないものもあると聞いている」と記している。)しかし、これでは単発的なものになりがちなのでオーラル・イントロダクションが有効であるとしている。「1年生の後半から2・3年生に対しては、新文型・新出語の導入・練習をしたあとで、本時に扱うテキストの内容をできるだけやさしくかみくだいて聞かせるようにする」のがよいという。確かに、持続して英語を聞かせ内容を理解させる体験が不可欠である。なお、定期テストなどでもリスニングの問題を出すことが大切であるとつけ加えている。

これらの記述は、英語を話すこと、あるいは発音が、まず念頭にある。しかし、言語学習は聞くことから始まるのであり、それへの配慮がもっとあってしかるべきと思われる。音声の基礎訓練は当然与えるべきとして、普段の授業において英語の音声から直接意味を取る練習の

機会を恒常的に設けておくべきである。教室英語、ALTの英語、CDやビデオの英語など、英語を聞かせる機会をいかに含めるかに工夫が必要である。教材の本物性にも注意が必要であろう。

●高等学校の場合

高校1年生を対象としたリスニングの指導案には、田鍋(1980: 22-24)がある。その骨組みを示すと次のようである。

- (1) Tape-listening (配布されたプリントは裏返しにしておく)
- (2) Check of listening comprehension
True-False statements, Questions and Answers (英語の質問に日本語で内容を言わせる、など)
- (3) Explanation of words and expressions
- (4) Tape-listening
プリントを見ないで前よりどのくらいよく聞き取れたかを試みさせる。
- (5) Listening and visual confirmation of the text
各自が1文聞いてはテープを止め、テキストを見てチェックする。Dictation (与えられたプリントの空白部分)の作業も平行してやる。
- (6) Further comprehension of the text
内容をおいながら trouble spots の説明をし、Dictation の部分の解答を与える。
- (7) Auditory-consolidation
テープを聞きながらテキストを見て silent-reading or reading aloud をさせる。最後はテキストを見ないで全体を通して聞く。
- (8) その他: (2) の True or False, Questions and Answers などの部分を今一度聞かせる。テキストの個人読みなどを試みる。(一部省略)

このような、かなり緻密な指導案も考えられていたが、現在から見ると、やはり不十分と思われる点に気づく。

この指導案では、英語の音声を与え、内容を理解することをまず求めている。この点では、リスニング・コンプリヘンション(聴解)の練習をしていることになる。

指導手順の(2)で、質問あるいは問題に答えさせている。現在望ましいとされる流れから言えば、これは一番最初に提示するのが一般的であると思われる。また、聞き取る内容がどのようなものであるのか、とも関連があるが、言葉でのみ答えるのではなく、図とか絵とか表などで答えさせる課題を与えるのもよい。

もともと、リスニングの作業に入るまえに、内容について教師が若干の説明を加えたり、学習者と対話したりして、背景知識(内容についてのスキーマ)をもつことがよいとされている。(テレビのスイッチを入れたり、途中から話に加わったりする場合には、聞きながら一理解しながらスキーマを徐々に得ていくこともあるが。)

- (3) で語句や表現の指導をしている。この活動も必要

なものであろう。ただし、指導手順上のこの場所で行うかどうかは、いろいろ異なる意見があると思われる。

(5) で、dictation をさせるなど、英語そのもの (language form) の検討に入っている。音声とスクリプトとの照合という作業、あるいは使用された表現の確認は、フィードバックとして重要なものである。これがなければ学習の進歩は少ないであろう。言語の確認を dictation と結びつけたことは、それなりに価値のあることと思われる。

英語そのものの確認の前に行く、内容の理解のさせ方にもいろいろある。例えば、全体の要旨をまずつかむ。そして徐々に細部の内容を取っていく。あるいは、その他の展開を予測したり、感想を述べたり、あれこれ関連することに触れたりするということもある。

英語そのものを確認した後に、問題点の解説をし、新出の単語や構文の発展的使用の練習をすることも可能である。

(7) (8) におけるように、再度、聞きなおしたり、音読をしたり、暗唱したりすることはよいことである。なお、機械的であり退屈になりがちなので実践はむずかしかもしれないが、同じ音声を何度も聞き込むことも大切である。十分聞き込めば、自然と暗唱できる状態になる。早々に音読をするよりは、英語の音声そのものが深く認知され、将来のリスニングによりよい効果をもたらすであろう。

4. 4 技能 4 領域におけるリスニングの指導手順

ここでは、中学校におけるリスニングの指導手順は特には取り上げていないが、教科書によってはリスニング用の課を設けているものもあり、好ましい傾向と言える。

● オーラル・コミュニケーション B の指導手順

上述のように 1989 年公示の学習指導要領により、「聞き話すこと」が「聞くこと」「話すこと」に分けられ、4 技能 4 領域という枠組みができた。現実の状況はともかく、「聞くこと」にも相応の力点が置かれることになったのである。

科目としては、「オーラル・コミュニケーション A」(日常会話)、「オーラル・コミュニケーション B」(聞くこと)「オーラル・コミュニケーション C」(スピーチ、ディベート)があった。

ここでは「オーラル・コミュニケーション B」(聞くこと)の指導手順を見てみる。

坂本 (1991: 90 - 97) は次のように述べる。

日本人を対象とする方法論が確立されておらず、実践的にも、まだ、ほとんど未開拓であるリスニング指導の実状の中、平成元年に告示された今回の学習指導要領の改訂とともに導入されることになる「[オーラル・コミュニケーション B] の授業展開を考えるうえで、何らかのかたちで参考になればと思う。(p. 90)

このように述べたあと、授業展開に関する基本的な考えを示している。単に聴解テストとそのチェックばかりしているのではなく、徹底した「聞きこみ」と体系的な指導が必要であること、リスニングは個人的な認知作業であるので、指導においても「個別性」の観点が不可欠であること、教材が学習者にとってアピールするものであること、などである。そして、selective listening、予測して聞くことの大切さ、キーワードやキーセンテンスの利用、文脈や場面等から推測して聞くこと、chunk をとらせる聞き方をすべきであること、などにも言及している。

1 教材に 2 時間を当てた授業を構想し、1 時間目は主に一斉授業スタイルで、聴解 (内容理解) 作業を中心に行う。2 時間目は、個別学習スタイルを取り入れたリスニングトレーニングを行い、そのあとでその結果についての簡単なクリニック・アドバイス指導を行うという。以下、具体例の柱である。いくつかの柱については説明を要約して加えておく。

[1 時間目] ——聴解 (内容理解) の作業過程

- ① 教材提示 (VTR) 対話理解という学習のねらいの確認。画面、音声からおおまかな内容をつかむ。対話者の名前を与える。
- ② 概要の推測 指名して、聞き取れたこと、読み取れたこと、推測できたことを尋ね、板書していく。理解が不十分なときは再度 VTR を流す。
- ③ 概要把握への誘導 板書を整理しながら概要把握へ誘導する。
- ④ 言語抵抗の水準化 未知語や理解困難な言い方について文字提示をし、読んで聞かせ、意味の確認をする。ノートをとる。文脈からの推測練習のため数個は触れない。

BREAK Song for the month

- ⑤ 展開把握 (TR) 場面展開の初めにくる語 (Oh, So) を注意して聞き取らせる。
- ⑥ 要点把握 (selective listening) 聞き取るべきポイントを提示し、対話を聞かせ、尋ねる。正解提示により要点のまとめ。
- ⑦ まとめ (VTR) 本時の聴解作業の内容を、VTR 再視聴で自己発見、確認をさせる。

[2 時間目] ——トレーニング、クリニック過程

- ⑧ リコール (VTR) 前時の学習内容のリコール。VTR 視聴中に、生徒テープに音声を一斉録音。
- ⑨ リスニングトレーニング I (15 分間) (LL) assignment sheet 配布。空所に語・句・節・文を補充する。作業により前時の内容理解で不明な点について自己発見、確認をさせる。時間 15 分。何回聞いてもよいが、1 語あるいは部分的には聞かない。必ず文の初めに戻って聞く。
- ⑩ セルフチェック、得点 スクリプト配布。課題解答のセルフチェック。困難点の自己発見、確

認。得点算出、記入。

BREAK Song for the month

- ⑪ クリニック、アドバイス 各課題のポイントについてアドバイス。共通した問題傾向についてクリニック指導。
- ⑫ リスニングトレーニングⅡ(LL) 課題内容…全体の対話をいっせいに2回聞きながら、スクリプト上の次の部分にマークする。(1)文字を見た時とまったく異なって聞こえる語、(2)ひとつの音の連続のように聞こえる部分、(3)ほとんど、またはまったく聞こえない部分、(4)その他の特別に指示される特徴的な音声現象。黙読練習。
- ⑬ アドバイス、レクチャー 生徒を数名指名し、マークしたものをそれぞれ尋ねる。簡単な説明やアドバイスを加える。その中の特定のもの、例えば「弱形」などを重点的に取り上げ、レクチャー。
- ⑭ 総まとめ(VTR) VTR視聴を通して学習内容全体を振り返らせ、かつ学習到達感を味わわせる。assignment sheet(トレーニングⅠ)を回収。

上に示した手順は、まず、おおまかな内容をつかみ、聞き取れたことからの概要の検討、言語の難しい点の解説をし、内容をつかませている。巧みに組み立てられ内容のある充実した指導となっていると言えよう。「聞きこみ」が重視されていることも、ひとつの重要なポイントである。なぜなら、リスニングは瞬間に意味をとることが大切であり、そのためには音声と意味、概念が直ちに結びつくことが求められるからである。また、推測、トップダウン的なリスニングができるように配慮されているのもよい。

「オーラル・コミュニケーションB」に関するある議論(新里・小菅・谷口、1992)で、次のようなポイントが提起されている。まず、リスニング教材そのものよりも、その扱い方が問題であり、あるタスクができればそれと関わりのないところは聞かなくてもよい、という指導と、英文の流れや音声的な特徴まで指導する、という指導の大きく分けて2つがあるという。例えばデイクテーションをして、解答欄が埋まればわかったものとするというのでは、テストがあって指導がないとの指摘に該当してしまう。また、学習指導要領の概要・要点主義に対し、概要・要点がつかめれば、それでよしとしないで、聞き取れない音声的な困難点の手当てが必要である、という妥当な意見も出されている。キーワードがつかめるためには、ある程度文章全体がつかめていないといけなないので、その指導が欠かせないという意見ももっともである。文法力、背景知識の指導も不可欠である。母語での普通の聞き取りは、いちいち細かいところまで注意を払ってはいないが、もし一語一語を聞き取る必要があれば、それができる。したがって、その方向での指導も大切であるという。最後にスクリプトを見せて、どこが聞き取れなかったか、どのような英語であったか、を確認させる

ことの重要性も述べられている。さらに、pre-listeningのような活動も有効とされている。

教材に関しては、この討論ではあまり問題にされていないが、やはり教材の質、特徴が指導法と絡んでくるのであり、概要をとるのか、細かいところまで聞き取るのかの指導も、教材によって決まってくる面もある。また、この2つの指導法は当然、相対立するものではなく、両方の聞き方ができるようにすることは当然である。さらに、2つだけの聞き方ではなく、後述のごとくいろいろな聞き方があり、ある程度それらに対応できる力を養成するよう努力すべきであろう。指導者の考えだけでなく、学習者が聞きたいと思うような内容を持った教材を使用することにも配慮することが望まれる。

●オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱの指導手順

学習指導要領により、「オーラル・コミュニケーションA、B、C」は「オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱ」にかわった。「オーラル・コミュニケーションⅠ」の目標としては、「日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」となっている。「オーラル・コミュニケーションⅡ」については、「幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話したりする能力を伸ばすとともに、…」とし、後半は「オーラル・コミュニケーションⅠ」と同じである。つまり、「オーラル・コミュニケーションⅡ」は「オーラル・コミュニケーションⅠ」をさらに発展させた高度な科目になっているといえる。

塩澤他(2004:143-145)には、「オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱ」に関し、教材の内容、生徒の学力、教授方法によって種々な授業が考えられるが、としたうえで、次のような指導手順の例を提示している。柱および若干の説明を要約して引用する。

a. ウォームアップ

b. 復習

前時に学習した語句、構文、重要会話表現などが主となる。大きな声で答えるように習慣づけるとよい。

c. 導入

(1) 新言語材料の導入

新出語句の意味と発音を確認し、文法、構文、慣用表現などを導入する。テーマや内容に則した視聴覚教材を用いてやさしい英語で説明する。

(2) 内容の導入

背景知識に関するヒントを与えながら、英語で行う。

d. 内容理解のためのリスニング

教科書やノートなどを閉じさせて、テープやCDを聞かせる。生徒のレベルによって、2度、

3度と聞かせるとよい。内容について問答する。

e. 対話の練習

- (1) ペア・ワークなどで相手と対話する。
- (2) 顔の表情やジェスチャーなども適切に使うようにさせる。
- (3) 役割を交代したり、ペアを替えたりして2、3回は練習する。
- (4) 対話のスピードを徐々に速くし、流暢に話せるようにする。
- (5) 1語1語の正しい発音だけでなく、子音連結、同化、脱落、音調、弱形など教材から取り出して練習させる。
- (6) 教科書の対話を聞かせ、パートナーと対話をさせる。

f. 置換

教科書に書かれている語句、慣用表現などを指示して、生徒に積極的に置換練習をさせる。

g. 整理

- (1) 重要な語句の意味、発音を確認する。
- (2) 重要構文の口慣らしを行う。

具体的な指導案も示されているが、ここでは割愛する。この指導手順を見ると、聞くことと話すことが同じ授業でなされている。もちろん、学習者のレベルや教材によっていろいろな場合があろうが、両方の技能が相乗的に伸びる場合もあれば、一方が伸びないこともあるように思われる。教師の十分な配慮が求められよう。

5. 外国におけるいくつかの指導手順

●聴解系の教授法におけるリスニングの指導手順

一時期を風靡した口頭作業重視、あるいはスピーキング重視といえるオーディオ・リンガル・アプローチなどへの反省として、リスニングの言語学習への重要性に着目した教授法が現れた。

Postovskyの、理解を中心にした教授法やAsherのトータル・フィジカル・レスポンス・アプローチなどがその中に入る(伊藤、1984: 36-37)。

Postovskyの授業の様子は、伊藤(1984: 127-128)に紹介されているし、その指導手順は、田崎(編)(1995: 148-149)に示されている。しかし、わが国では、聴解アプローチは報告されている例があまり多くないとされている(田崎(編)、1995: 151)、不明な点もあるので、ここでは割愛する。

●伝達重視の教授法におけるリスニングの指導手順

伝達重視の教授法(communicative language teaching)が現れて以後、その方向にそった指導手順がいくつか提案された。以下、それを見ていく。

まず、次の手順を見てみよう。これは、広く唱道されている手順といえる。

Pre-listening

In-listening (While-listening)

Post-listening

この指導とほぼ同じであると考えられる指導手順がMatthews(1985: 62)に示されている。それは、Orientation、Tasks、Follow-up workのステップを踏む。内容をまとめてみると次のようになる。

Orientation

何を聞こうとしているのかについての方向づけをするのがよい。学習者に質問をしたり、意見を求めたりしてトピックを導入する。必要であれば、キーワードやフレーズを提示したりする。聞く教材は、討論なのか、対話なのか、独白なのか、といったことも知らせておくのがよい。

常に、文章を聞く前にタスクを設定しておく。何を聞き取るのかを明白しておくのである。概要をつかむのか、特定の詳細を聞き取るのか、感想を言うのか、といったどのようなタスクを課すかは、文章のタイプや内容により決まる。

同じテキストを使って、しばしば複数のリスニングの仕方が練習できる。

Tasks

1回目のリスニングでは、いくつかの基本的な事実(話し手の数とか、場所とか、雰囲気はどうか、など)をつかむための数個の、かなり直接的な質問に答えさせる。それによってリラックスでき、概要や特定の情報を聞き取る練習ができる。2回目、あるいは3回目のリスニングでは、もっと詳しい情報を引き出すことが求められる。このステップで使えるタスクにはいろいろなものがある。各作業はなるべくライティングの少ないものの方がいいであろう。それによって注意がテキストにたえずおかれているようにできる。(もっとも、リスニングのねらいがノートテイキングの練習である場合は別である。)情報転移(information-transfer)、true/falseの質問、絵や文の整序、などは大部分書く作業を伴わない。ついでながら、同じ聞き取り用の文章でも、タスクの難易を変えればいろいろなレベルで使用することができる。

Follow-up work

この時点で、聞き取り用の文章を捨て去ることは、無駄をしていることになろう。多くの有用な活動がさらに可能である。すなわち、繰り返し現れる構文や機能に焦点を当て、治療の練習(remedial practice)として使用したり、文章の構成(論理関係を示す接続詞)の特徴を聞き取ったり、文章の一部を口頭、あるいは文字で再構成することもできる。あまりに多用しすぎて学習者が退屈を感じたりしない限りは、ひとつのテキストをいろいろなことに使用することはよいことである。

まず、聞く態勢を作る。質問をしたり教師が説明したりしてトピックを特定する。キーワードや語句の提示も必要とあれば行う。聞く材料の種類（討論、対話、独白など）を示す。タスクの設定をする。

次のステップで、質問などの課題により、基本的な事実を聞き取らせる。2回、3回と、より詳しい情報を聞き取る。

最後のステップでは、類出の構文や機能のさらなる練習をしたり、文章の構成の特徴を聞き取ったり、文章の一部を用いて再生の練習もする。やはり内容をとるだけでなく、言語学的なことも含め細部の検討を加えるのがよさそうである。

この指導手順は、聞き取りの包括的な指導をねらったものであるように感じられる。特に、内容・意味中心にリスニングを考えているのはよい。分かるためのヒントも与えられている。つまり、指導という要素が多く入っている。

しかし、映画を見て理解したり、実際に相手のいるコミュニケーションの場面でうまく聞き取る、といった技能の指導にはあまり配慮がなされていないように思われる。

他方、Hadfield and Hadfield (1999 : 2-7) は、初歩のレベルのリスニングの指導に次のような手順を工夫し、さらに、それに従って使用されるべき教材を提示している。

各ステップは3つの段階から構成されており、以下、その内容を紹介しながら手順を概観する。

Warm-up——学習者にトピックを示し、注意をそれに集中させる。

Listen and respond——活動の主たる部分である。学習者はテキストを聞いて、いろいろな形で聞いたことに対し応答する。

Follow-up——この段階では、他の言語技能を用いて、聞いたことを練習する機会を与える。

さらに各ステップを詳しく見てみよう。

Warm-up

学習者にどのようなテキストが流されるのかを少しばかり知らせておく。学習者に話しておくか、推測してもらう。

前もってむずかしい語彙を覚えておくこともあるかもしれない。しかし、新語すべてを前もって教えるのはよくない。新語の意味を推測するのは、重要な聞き取りの技能であるので、そのための練習を与えるのがよい。レッスンの前にテキストを用意し、推測しやすい語はどれか、むずかしいのはどれかを決めておく。むずかしい、あるいはコンテキストからは推測が不可能で、しかもテキストの理解に必須であるものだけを覚えておく。他の語は学習者に推測させる。むずかしい語や表現はレッスンの後のほうで、説明できる。

warm-upの活動はできるだけ短く行う。——約5

分程度。それを超えない。ねらいは、学習者にそのトピックに興味を持ってもらい語彙に少しばかり慣れてもらうだけである。

Listen and respond

リスニングの技能を培うのがむずかしいひとつの理由は、教室外であまり英語を聞くことがない、あるいはそれを理解する必要がないからである。自信をつける最良の方法は、規則正しく聞き取りの練習を与えることである。自分がネイティブのレベルでないと自身の英語を心配しているかもしれない。しかし、いわゆる「完全」なモデルをたえず聞くということより、聞き取りの練習をする、ということがはるかに重要である。ともかく、外の世界で英語を使用する場合、しばしば非英語話者の英語を理解する必要が起こりうるのである。

可能であれば、いろいろな種類の英語を聞く練習をするのがよい。

また別の理由もあり、それは学習者がすべての語を理解しようとし、完全に分からなくなってしまうことである。学習者がひとつの句または語をあれこれ詮索しているうちに、話し手は3つも4つも文を言ってしまう。常に自問すること。「このテキストの主たるメッセージは何だろう。主たるポイントは何か。」まず第一に学習者が主たるポイントを理解することを手助けすることに専念すること。その後にのみ、もし必要があれば、言語の細かい点に焦点を当てるべきである。

主たるポイントをつかませるのに使える技術がいろいろ示されている。

- ・ 聞いて完成する…学習者は、与えられた情報を聞き取りそれを用い、絵、地図、図、表、あるいはチャートを完成する。
- ・ 聞いて訂正する…学習者は、いくつか事実に関する誤りのあるテキストを聞く。その中にある誤りを見つけ、訂正する。
- ・ 聞いて行う…学習者は、一連の指示あるは動作を聞いて、その通り行う。
- ・ 聞いて描く…学習者は、ひと、場所、あるいは物が描写されるのを聞いて、それを描く。
- ・ 聞いて推測する…学習者は、ひと、場所、あるいは物についての描写を聞いて、それが何であるのかを推測する。
- ・ 聞いて組み合わせる…ある描写を聞いて、それを、例えば、絵、ひと、物、あるいは場所と結びつける。
- ・ 聞いて並べかえる…学習者は情報を聞き、それを用いて絵あるいは文を正しい順に並べかえる。

listen and respondの手順は以下の通りである。まず、活動のこの段階では、学習者は最初テキストの主たるポイントを聞き取るように指示され、その後に始めて細か

いところを聞き取る。ここでは5つの基本的なステップがある。

1 学習者に何を求めているのか、どのようにすることを望んでいるのかを明確に説明し、次に進む前に指示が理解されていることを確かめる。

2 学習者が何をすべきかを理解したと確信したら、途中で止まることなくテキストを読むなり、対話を演じるなりする。できるだけ自然に話すようにする—あたかも物語を語っているように、あるいは電話で話をしているように—単に声に出して読むのでは良くない。最初にテキストが提示されるときには、学習者はただ聞いているだけにする。

3 2回目にテキストを提示するときには、学習者は聞きながら与えられたタスクを行う。学習者がうまくそのタスクを完成するためには、2回以上、読んだり演じたりする必要があるかもしれない。ここでも、途中で止まることはしない。

4 学習者にペアで答えをチェックさせる。その後、クラス全体で教師自身がチェックを行う。

5 以上のような手順を踏んで、初めて学習者はテキストを—あるいはその一部を—細かく聞くことになる。そして教師は学習者がどうしても分からない語や表現を教えていく。場合によっては、教師がそれらを予測して説明を準備しておくことができる。しかし、時には学習者が指摘するまでは、何が最も困難なのか分からないこともある。(あるいは、学習者にとって大変やさしくて、教師がほとんど説明することがないかもしれない。) レッソンのこの段階では、むずかしい点を見出し、学習者を手助けしながら、教師とクラスとの間で、たくさんのインタラクションが生じる。この段階で教師が行うべきことがらを示しておく。

□答えを確かめる。学習者の答えを黒板に書きとめる。次に、テキストを再度聞く。関係する語句をもう一度読んだり、学習者がまだ理解していないことを説明したりする。

□テキストのなかで詳しく見てみる部分を選ぶ。例えば、特にむずかしく思われる文など。その文のなかの1語にワンスペースを与えるようにして、黒板に一連のブランクを作る。

(もし、よりやさしいものにしようと思ったら、語のいくつかを入れておく。)

テキストの該当部分を再度読み、できるだけ多くの語を空欄に入れるように求める。クラスとともに文を完成させ、すべての空欄を埋める。

□語の意味がコンテキストから推測できる場合には、それが含まれている句あるいは文を繰り返し、その語

の意味することを推測するか、それにとって代わりうる他の語を言うように求める。

□聞いたことから、役に立つ句や表現を選び、それらを黒板に書き、学習者にその意味が分かるかどうかを尋ねる。もし分からなければ教師が説明をする。

□学習者にリスニングのテキストのコピーを与えるか、それを黒板に書く。彼らに読むことと聞くことを同時に行わせる。これは音声の語と文字に表された語を結びつけるのを助けるので、役に立つ指導技術である。しかし、あまり頻繁には使わないのがよい。そうしないと活動の最初のところで、テキストを理解しようとあまり努力をしなくなるからである。

Follow-up

聞き取りの活動をした後、もし時間があれば、他の技能領域の活動、例えばスピーキングとかライティングによって強化することができる。これにより、学習者は学んだことを練習する機会や、別の技能との関係を確立する手助けを得ることになる。

以上のように Hadfield and Hadfield は述べている。規則正しく聞き取りの練習を与えること、主たるポイントを理解してから言語の細かい点に注意を向けることなど、大切なことが指摘されている。

●伝達重視の指導におけるリスニングの指導手順の変化

Field (2002 : 242-253) は、リスニング指導の手順の変化に興味深く記述している。彼は、リスニングの技能に時間をさくようになったのは、1960年代の終わりからであるとしている。すでに触れた通り、かつて日本では指導要領のなかで、スピーキングとリスニングは同じ技能領域とされていたが、1989年告示の指導要領により別々の技能として扱われ、リスニングにも焦点が当たり始めた。

リスニングに光が当たり始めたのは、ごく最近と言ってよい。

さて、Field によれば、当時の指導手順はすでに見た

- ① Pre-listening
- ② Listening
- ③ Post-listening

の流れであったという。しかし、各ステップにおける活動は大きく変化し、以下のようになったと Field は解説する。

Pre-listening

最重要の語3～4つを授業の初めに提示する。最重要というのはその理解がなければいかなる理解も得られないという意味である。実際のコミュニケーション場面では前もって未知語が説明されることはない。

((Pre-listening Activities))

語彙、文法、トピックについてのブレインストーミン

グはあまり長く行わない。2つの簡単な目標を掲げる。

1. 実際なら得られるであろう、十分なコンテキストを与える。
2. (聞こえてくるであろうことを推測するように言うことにより) 動機付けを行う。

これらは5分間で行える。

Listening

2回は聞かすのが一般的である。この方法は自然ではないが normalization のプロセスが必要なのである。すなわち、ピッチ、スピード、音質に慣れる必要がある。

((質問を提示する))

((Listening Tasks))

伝統的な comprehension questions よりも効果的であるのは task である。それには labelling, selecting, drawing, form filling, completing a grid などがある。

task は、実生活でのリスニングの経験でなされるタイプの応答をモデル化しているうえに、理解をチェックする、より信頼できる方法である。

task の3つ目の長所は、個人の応答を求めている点にある。

((Authentic Materials))

もうひとつの展開は本物の教材がより多く使われることである。

naturalness of language

real-life listening experience

この2つの点で本物の教材を導入するのが望ましい。すべてを理解することを期待しているわけではないことを学習者に知らせておく。段階づけされていない教材から情報を得ることに喜びをもたせる。

本物の教材に対処できるようにする方法としては、言語を易しくするのではなく、task を易しくする。例えば、マーケットの店主の声の authentic な録音を聞かせた場合、すべての野菜の名前を書き留めるといった task を設定する。

また、会話的な話し言葉 の特徴を体系的に教えること。言いよどみ、つかえ、言い直し、長くて整わない文章など。ひとつの authentic speech からひとつの特徴をもつ例をいくつか選び出し、それを聞かせ書き取らせる、などの方法があるという。

((strategic listening))

非母国語話者は、思ったより少ない量しか把握できない。注意深い学習者にはリスクをとり、推測をするように仕向ける。

他方、リスクを取りたがる学習者には、新しい証拠が入ってきたら、それに照らしてチェックするように促す。

すべての学習者に示すべきことは、推測をすることは聞き取りに失敗したということではないということである。

Post-Listening

聞き取り用のテキストに現れる文法は吟味しない。構造主義的な見方では、学んだ事柄を強化する手段として

リスニングを行うということが行われていたのだが。

しかし、言語の機能を拾い出して学習者の注意を向けることは価値あることである。例えば

‘Susan threatened John. Do you remember the words she used?’

聞き取りのためのテキストは、しばしば apologising, inviting, refusing, suggesting 等のすぐれた例を提供する。

‘listening-and-repeat’ phase も、また、排除された。parroting とほとんど同じであるという議論からである。このことは、完全には納得のいくことではない。それは、学習者の lexical segmentation(語彙を分割する、語をひとつひとつに分ける) の能力のテストをしていた。——すなわち音声の流れのなかで個々の単語を確認するためであった。

しかし、この考えは、現在の伝達重視の考え方とはうまく合致しない。

post-listening の一部として、コンテキストから新語の意味を推測することを学習者に求めることができる。

方法としては、目標とする語 (複数の) を黒板に書き、それらを含む文 (複数の) をリプレイし、それらの意味を考えるように求める。

望む場所の頭出しがむずかしく、やりたがらない教師もいるが、使用すべき文を別のカセットにコピーすればよい。

以上、Field の指摘である。

さらに、今日良いと考えられているリスニングの指導手順のフォーマットは、40年前のものとは相当異なるとし、以下のものであると Field は続ける。

Pre-listening

コンテキストの設定 動機づけ

Listening

Extensive listening (その後、コンテキストや態度についての質問)

タスクの提示 / 質問の提示

Intensive listening

答えのチェック

Post-listening

機能的な言語を調べる

語彙の意味の推測

大きな枠組みは類似しているが、各ステップで行われる活動には変化が現れている。これらの変化はいわば表面的なことがらであり、真に必要なことは、目標とリスニングの授業の構造の再検討であるという。

われわれの現在のアプローチの限界は、今なおリスニングを教えるのではなく、テストしているという点にあるとする。

どの程度理解しているのかのチェックの方法があまり

ない。2語ばかりが分かって賢明な推測をして正解を得ているのか、100%とらえて意味を理解し正解を得ているのか、判断がむずかしい。リスニングのプロセスに関心を持つべきであるのに、結果 (product) に焦点を当てている。これらの問題が残っているとする。

誤答のほうが、正解より、より多くの情報を持っているので、どこで、どのように理解しそこなったのか、の分析に時間をかけるのは有意義であるとも述べる。

この見方からすれば、リスニングの授業の主たる目標は、diagnostic なるものである。そこで次のような提案を Field はする。なぜ誤解が起きたのかの証拠を見出すには、治療的な小リスニング練習を工夫するとよい。例えば、'was' 'to' 'who' などの弱形がとらえにくい。そこで弱形を含むいくつかの文を書き取らせる。治療用の練習は、語の認識といった下位レベルの技能に限られるべきではない。高いレベルの技能 (重要な情報、推測、話題のマーカ―に気づく、など) のためにも使いうる。

リスニングの授業に診断的な目標を入れるには、授業の型を変える必要があるかもしれない。教師によっては、pre-listening period ではなく post-listening period を長くして、学習者の問題点を把握し、対応をとるほうがはるかに実りが大きい。

相手が言ったことを完璧には理解していない実生活の場面でのリスニング過程をより一層シュミレートしたような授業が必要である。つまり

- ・断片化された sections のなかの語をつかむ。
- ・推測をする。(自信を持って聞き取れた部分をつなぎ合わせて)
- ・次に聞こえてくるテキストにより推測をチェックする。

この種のテストにより、実生活におけるタイプのリスニングの練習を与える。

短いパセッジを聞かせ、理解したことをペアで比較させる。再度、聞いたうえでペアで修正を加える。その後、クラス全体で検討する。このようにすれば、はるかに相互作用的な活動になるとする。

上記のように、Filed は多くの問題を指摘し、有用な提案をしている。

6. おわりに

リスニングの指導といえども、それぞれの時代に広く用いられていた英語教授法の影響を強く受けている。それは当然のことでもあろう。それにしても、日本だけでなくリスニングの指導に焦点が当たったのは、比較的新しいことなのである。Field (2002) も 1960 年代の終わりからだと述べていた。その後のリスニング指導法の発展は目覚ましいものと言えよう。

一般的には、リスニング指導の手順は、概略、pre-listening、in (while)-listening、post-listening 的内容を持ったステップを踏むものが多そうである。リスニングのテストでなく、指導をする、ということになれば、いきおいこのようになるであろう。まず、内容、言語学、背

景知識などでリスニングに参考になることを与えておき、リスニングの活動に入ることが考えられる。post-listening で内容や言語学的なポイントを発展させ、訓練を施すことは、日本のように外国語として英語を学ぶ環境では必須のことと言ってよいであろう。聞かせっぱなしでは、十分効果が上がらないのではないか。

もっとも、リスニングにはいろいろのタイプのものがある。Morley (1984 : 11-14) は、リスニングの種類として

- (1) Listening to repeat — a tool and
- (2) Listening to understand — aural comprehension as an end in itself.

のふたつを示し、その差異を十分認識して、(スピーキングのためのモデルを聞く、リスニングではなく) 内容理解のリスニングを行うべきことを示唆した。(そしてもうひとつ、教授法の核としてのリスニングもあるとする。すなわち Postovsky や Asher らの考えたアプローチのなかのリスニングである。

- (3) Listening to learn a language — the comprehension approach to language learning.)

口頭練習重視の時代には (1) 「リピートをするための聞きとり」にエネルギーを注いでいたことになる。

さらに、内容理解のリスニングのなかにも、望月 (編著) (2001:111-116) は、集中的 (intensive) リスニング (= 個々の特定要素を聞き取る活動)、選択的 (selective) リスニング (= 与えられた多くの情報から、指定された情報だけを聞き分ける活動)、包括的 (global) リスニング (= 話の概要や要点を聞き取る活動)、相互作用的 (interactive) リスニング (= 直接には言われていないことを推測したり、推論で導き出すタイプと、与えられた課題に対して、自分の知識、気持ち、立場などを反映させながら、判断を下したり、指示に対応したりするタイプのリスニング)、対人的 (interpersonal) リスニング (= 話し手に対し、聞き手の側が反応 (フィードバック) しながら聞く活動) を区別している。

これらのリスニングのタイプに対し、それにふさわしい指導手順を考える必要があるだろう。

よくある日常のリスニングでは、場面や状況、相手などが見えており、何が言われるのか予測ができています。しかし、ラジオを入れたり会議に途中から入った場合には、流れや状況を、話されることからつかまなければならない。pre-listening をなくして、すぐにリスニングそのもの (while-listening) を行うこともある。そのようなことへの対応も必要であろう。また、pre-listening で新出語彙や構文を提示しても、十分身につけていないことが多く、while-listening でその知識、技能を利用できないことが多い。

リスニングとスピーキングをどのように関係づけて指導するのか、またリーディングやライティングなどの他の技能との関係はどうなるかの検討も必要である。

参考文献

- Field, John (2002), "The Changing Face of Listening." In J. Richards & W. Renandya (Eds.), *Methodology in Language Teaching: An Anthology of Current Practice* (pp.242-247). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hadfield, Jill and Charles Hadfield (1999), *Simple Listening Activities* (Oxford basics) Oxford: Oxford University Press.
- 広野威志 (1980)、「中学校でのヒアリング指導」『英語教育』大修館書店、28 卷、12 号、2 月号、pp. 19-21.
- 伊藤嘉一 (1984)、『英語教授法のすべて』大修館書店
- 片山嘉雄・篠田治夫 (編著) (1979)、『英語科教育学』ミネルヴァ書房
- Matthews, Alan (1985), "Listening Skills." In Alan Matthews, Mary Spratt and Les Dangerfield (eds.), *At the Chalkface* (pp.60-63). London: Edward Arnold.
- 望月昭彦 (編著) (2001)、『英語科教育学』大修館書店
- Morley, Joan (1984), *Listening and Language Learning in ESL: Developing Self-Study Activities for Listening Comprehension*. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich, Inc.
- 新里眞男・小菅和也・谷口幸夫 (1992)、「編集委員鼎談——「B」を総括する」、新里眞男他 (編著)『オーラルコミュニケーション展開事例集 II』一橋出版株式会社、pp. 232-236.
- 大沢 茂 (編集責任) (1978)、『現代の英語科教育学』南雲堂
- 坂本恵司 (1991)、「聴解 (内容理解) とリスニングトレーニングのシステム化」、新里眞男他 (編著)『オーラルコミュニケーション展開事例集』一橋出版株式会社、pp. 90-97.
- 清水貞助 (1980)、『英語科教育学—理論と実践—』開拓社
- 塩澤利雄他 (2004)、『新英語科教育の展開』英潮社
- 田鍋 薫 (1980)、「高校でのヒアリング指導」『英語教育』大修館書店、28 卷、12 号、2 月号、pp. 22-24.
- 田崎清忠 (責任編集者) (1995)、『現代英語教授法総覧』大修館書店

